

イラク国外避難民支援「寺子屋プロジェクト」企画

経過報告とその見直しについて

NPO 法人 PEACE ON 代表 相澤恭行 事務局長 香緒里

2003 年に始まったイラク戦争とその混乱による治安悪化が長引きます。住む家を追われた避難民の数は、国内外合わせて 400 万人をゆうに超えるといわれ、深刻な国際問題になっています。

隣国シリアにおいては、およそ 150 万人。世界で最も多くのイラク難民を多く抱えています。そのシリアにて、学校に行けない子どもたちに小さな交流の場を作り少しでも学ぶ機会を提供しようと、2007 年度から「寺子屋プロジェクト」と銘打った新しい企画を検討してきました。

2007 年 5 月、シリア首都ダマスカスとその近郊にて現地調査の上、企画書を公表。現地の協力者を通じてシリア政府に活動の許可を申請しました。労働社会省、外務省、さらには在日本シリア大使館の協力も得ながら、本国からの返事を待ちました。2008 年が明けてようやくの返事は、さらなる詳細を送ってほしいということでした。3 月にダマスカスの外務省本部を訪れ、担当官の国際機関局次長と面会しました。外務省としてこの企画自体は歓迎するが、年間予算を 300 万円から最低 1000 万円に引き上げが必要であり、また内容をかながみて教育省の承認も必要であるとのことでした。

各方面から話をうかがうと、やはりどの国際 NGO も活動承認（最終的にはシリア赤新月社による）までには大変時間がかかるようで、1 月の時点で承認されたのは申請 13 団体中わずか 2 団体であり、いずれもまだ実質的な支援活動には取り掛かれてないそうです。シリア政府はこれまで国際機関の受入れを制限してきたため、ここ数年のイラク難民の急激な増加に伴う国際 NGO の活動申請の対応に苦慮しているのではないかとのことです。

年間 1000 万円という数字は、小規模支援を企画していた当団体としては予算が組まれません。またシリア政府との交渉、調整のための長期滞在スタッフも確保できません（イラク人のシリア入国は 10 月からビザが義務化され厳しくなった）。当初計画していた形の支援は断念して、企画を見直さざるを得ない状況です。

現時点での見直し案としては、①「カリタス」など、すでにイラク避難民支援をしているシリア国内団体への協力（寄付等）、②イラク人アーティストとの交流等これまで当団体で実績のある文化交流企画など、低予算で開始できて比較的シリア政府の活動承認が得やすいものから取り掛かる、などが挙げられます。

これまで集まった当企画に限った寄付金（10 万円未満）は、とり急ぎ国内支援に使わせていただき、イラク国外避難民支援が実現した際に割り戻します。

***2008 年度定時総会の資料より一部編集、抜粋しました**